
花～桜のない季節～

空風灰戸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花々桜のない季節

【Zマーク】

Z6083E

【作者名】

空風灰戸

【あらすじ】

その春は異常気象に見舞われていた。そのせいで四季はめちゃくちゃになり、日本人が愛する桜という花は見られなくなってしまった。

日本人にとって桜は宝物のようなものだ。

その年の春は異常な天気だった。まだ三月だというのに蒸し暑く、雨はたくさん降りまるで梅雨にでも入ったかのようだった。三月で六月の気象だから四月は七月の気候になるというわけで、四月には七月の暑い日が続いた。じゃあ、前戻つて一月の天気が五月の気候だというとそうではなかった。一月は一月で寒く、一月上旬になると唐突に暑くなつた。つまり、一月下旬は冬のような寒い日が続いたが、上旬には五月なみの暑さになるという気候だったのだ。

気象庁に勤めている私はその気候について調べてみたものの、詳しくはわからなかつたが世間の噂どおり地球温暖化の問題であるという結論に達した。

だが、私はその結論に達するのが嫌だつた。この気候が毎年続けば私が毎年期待しているものを見ることができなくなるのだ。そつ、日本の四月といえば誰もが答える桜という花を。

この年の桜は一本も咲かず、つぼみの段階で終わつてしまつた。私たち気象のものたちとしてもこれは残念でならず、桜前線についてもこの年に限つては報道されなかつた。

一月下旬は一月の気候で上旬は五月の気候だし、三月は六月の気候だし、四月は七月の気候で四月の気候になる時がないのだ。それでは無論、桜など作季節がないわけだから咲くはずなくその年の私の楽しみ　いや、日本人の楽しみは地球温暖化に奪われてしまつたのだ。

「温暖化なんだから仕方ないだろ。これに限つてはおれらだけじやどうにもならねえよ」

私の同僚で親友でもある孝一はそういった。確かに孝一のいうこ

とは普通の考え方だ。私だけがんばってもこの状態を改善はできない。しかし、何もやらないといつのではさらに温暖化を促進させてしまうだけだと思い、来年こそ桜が咲くよつと私は対策をやることにした。

案外、やろひと思ひ目標に向かつてやつて行くと事は続くものであるのをこの年に私は実感した。私はもともと長続きしない性格で、掃除機セットはかつたもののすぐ使わなくなるし料理を始めようと料理器具をかつたものの今ではしまいこんだままだ。だが、それだけならないのだが、この性格には恋にも当てはまり、交際したのはいいものの、すぐに別れてしまつのであつた。

そんな性格の私ですら、続けた地球温暖化対策をみじと一年間続けることができ、その年の四月が再度やつてきた。

その年の気候には多少の変化が現れた。昨年の一月上旬の気候は前述どおり五月だったのが、四月中旬の気候までになつたのだ。それでもいままでの気候と比べれば違うが、その結果に私は喜びを感じた。だが、四月中旬の気候でも桜が咲くことはなかつた。

「でもまあいいじゃないか」と孝一は言つた。「このまま続ければあと一年ぐらい後にはきっとみれるよ」

「しかしなあ、私は一年に一度は桜が見たいよ。孝一はそうでもないのか?」

「まあ、確かに酒は飲みたいな」

「花より団子か」私は少しあきれたよつた声で言つた。「でも、確かに桜の下で飲みたいな」

「じゃあ」と孝一は思ひたつたよつに言つた。「どうせ桜は咲いてないだろうけど、明日あたり飲みにいくことを約束するか?」

翌日は私と孝一は休みだつたので、夜飲みにいくことを約束した。そんな翌日の昼間は特にやることもなかつた。最近は早く帰ることができたりしたので、部屋はさほど汚れておらず掃除も短時間で終わつたし洗濯も簡単に終わつてしまつた。私は未婚で結婚歴がな

いので、家事がいつの間にかに上達していた。

何をしようかと考えいたとき、もしかしたらひとつぐらい桜が咲いているのではないかと思い、近所の桜の木を見て回ることにした。しかし、近所の桜だって世間の例外ではなかつた。桜なんてもとより、春の花すらも咲いていない。つぼみこそあつたものの、ほとんど開いていなかつた。それでもやることはないわけだし、そこらじゅうを回つてみてみるといろんな話が耳に入つた。

「もう桜は咲かないんだと思うよ」車椅子に座つている年老いた女性に車椅子を押している女性はそう言つた。

「そんなことにでもなつたらわたしの唯一の楽しみがなくなつてしまふよ。もう一度でもいいから桜を見たいねえ」

私はそれを聞いて心が重くなつた。いつ死ぬかもわからないおばあちゃんが桜を見るのを楽しみにしているといふのに、それが咲かないなんて。それはこのおばあちゃんに限つたことでもなく、年老いていよいよ年老いていなかろうとほかにも大勢そういう人はいるであろう。

地球温暖化。それは日本人にとつてはもつとも憎たらしいものであるのだ。

その夜に私は孝一にその話をした。

「確かに。日本の国花ともいえる花だから昔の人もそれが好きだつたんだろうよ」

「まったく。本当、前々からささやかれてきてはいたが本当になるとは思わなかつた」

「琢志に限つたことでもないよ。世間の人でそう思つていなかつた人なんてそうそういないだらうよ。近い将来じゃなく、もつと遠い世界二十一世紀とでもいうか？ そのときにあると思つていたんだらう」

「さすがに二十一世紀まではいかなと思つたがね。その半分目に

「地球は滅びるとか言う話だつたし」

「確かにそのころには滅びてそうだな。今の現状でこんななんだし」

私はその話に怒りながら話したせいか飲みすぎて一日酔いになってしまい、その日は休暇をもらい仕事を休んだ。昼になるとなんか気分がすぐれてきたのでそのままの風にあたるついでに散歩することにした。

この散歩がたまたまではあるが、前日とは別の場所を通り、あるお寺の前に来て私は足を止めた。その寺は、この近所で隠れた花見スポットになっており、毎年少數な割には綺麗に桜を見る事ができるポイントだつた。隠れた場所というのは寺が階段を上らないとダメなところにあり、下からその寺を見ても桜は見えないのだ。その桜はお寺の奥のほうにあり、そこは下から見えないから隠れた場所となつていて。ただし、階段がこれまた多く、確かに三百段はあつたように思う。だから、あえてそこにはいかないという人もいるようだつた。

そのことを思いだして心が私の体から離れていくうちに私の体はいつの間にかに階段を上つていて。一日酔いで普段あまり運動をしない私が三百段を上るのは一苦労で、上つたときには完全に息が切れあえいでいた。

ひとまず休憩し、呼吸が整つてから私は桜が綺麗に咲いていたスプットへと向かつた。

当たり前ではあるがそこには誰もいなかつた。そして、パツと見た感じだと桜は一枚も咲いておらずつぼみだけがただただ枝にあるばかりだつた。私はゆっくりと歩き、木々を見て回つていつた。木々ははげたままの状態でさびしく思えた。

この場所でこの光景をみたのは初めてだつた。ここには春にしか来なかつたからだ。だからか、私には一瞬でも今は冬だと感じたのが十分に五回はあつた。

春が来た感じがしなかつた。

「何をお探しかな？」

不意に後ろから声が聞こえたので振り返つてみると、寺の住職がたつていた。住職はもう老人で暑そうな服装をしているが、年のせ

いなかどうかはわからないがあまり暑そではなかつた。

「桜を探してます。いえ、毎年ここには綺麗な桜が咲くものですか
ら」こんなときでも一枚ぐらい咲いてるかと思いまして

「そういえば、あなたは毎年こられていましたねえ」

住職は言葉の意味を理解して、毎年來ていた人の顔をすぐに思い
出したよつに言つた。この住職の記憶に私は敬意を表した。

「ええ。しかし、やはりないよつですね。この気候じや仕方があり
ませんが」

「いや、桜はありますよ」

その住職の言葉に私は驚くのと同時に少し心が躍つた。私が「本
当ですか」と聞き返すと住職は言つた。

「本当ですとも。こちらにきなされ」

私は住職の後を歩いて行つた。歩きながら住職は私のよつな人が
何人も来たことを伝え、その人たちにもその桜を見せたのだという。
「ですがあまり期待なさらいでください。桜は一枚しか咲いてお
りません。風で吹き飛ばされてしまつていればもうありませんよ」

前日は庁にいなかつたがそれほど風は強くなかった。その前には
ずっと庁にいたが、それほど強い風は吹いていないのを私は知つて
いた。私は一步歩くごとに胸が踊り始めた。これほど桜を楽しみに
しているのは初めてだつた。

そして、ついに私の前に一枚の桜があるのを私は目にした。

その桜は風に吹かれていたが、飛ばれまいと踏ん張つており、ま
るでその姿を強調しているかのよつにも思えた。

「これでお気に召したかな?」と住職は言つた。

「ええ」と私。「桜一枚でも見れたら私は幸せです。ああ、やつと
春がきたなあ!」

これでも私はまだ三十なのだが、時々おやじくさいことを言つ。

そのおやじくさい発言を住職はどうとも思わなかつたらしかつた。

私は気が済み、住職と共にその場所を去ろうとしたとき、唐突に
強い風が吹いた。私はその風に驚き、振り返つてみると桜は宙に舞

い、地面におちてしまつた。それと同時に私の春もなくなつてしまつたように思えた。私はその花びらを拾うと住職は言った。

「その花びらがほしいなら持つていつてもかまいませんよ。おちて

いただけでは何の意味もありません」

私はその提案を受け入れ、花びらを家に持ち帰つた。

私がその桜が家に入ったときには、唐突に今年が始まったように思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6083e/>

花～桜のない季節～

2010年10月8日15時10分発行